夏夜を照らす「おかえり」の灯

毎日新聞　2023/8/14 18:00

お盆を迎え、震災遺構の大川小学校でともされた紙灯籠（どうろう）＝宮城県石巻市で2023年8月13日、北山夏帆撮影

亡き友も、古里を離れた仲間も、これからを生きる子供たちも「おかえり」――。東日本大震災で児童・教職員計84人が犠牲になった宮城県石巻市の大川小学校で13日、追悼と地域再生の願いを込めて紙灯籠（どうろう）に灯をともすイベントが開かれた。「おかえり」などとかたどられた柔らかな明かりが、お盆の夜空を照らした。

イベントは大川小の卒業生らでつくる「Team大川　未来を拓（ひら）くネットワーク」が企画した「おかえりプロジェクト」で、昨年に続き2回目。この団体のメンバーは、北海道や東京、高知、福岡の学校で防災講話を実施している。各地から寄せられた「未来へここから」などのメッセージも、紙灯籠の明かりに照らし出された。

震災当時5年生だったこの団体の代表、只野哲也さん（23）は、東京や福岡の小中学生6人を案内し「桜の木の下でお花見給食をしたんだよ」などと説明。「悲しい場所と思われるけど、みんなで学び遊んだ思い出がいっぱいある。また来たいと思ってもらえたら」と話した。同じく5年だった副代表の今野憲斗さん（24）も「子供の今、感じている楽しい感覚をずっと忘れないで」と語りかけた。

只野さんらは古里に誰もが心安らぐ居場所を求め、市から土地を借りてカフェなどの活動拠点を作ろうとしている。只野さんは「大川に『いつでも帰ってきていいよ』と言える場所を作っていきたい」と話した。

この日は震災前のように学校に子供の歓声を響かせようと、只野さんらと交流のある聖学院大学（埼玉県上尾市）の学生らの協力で手形アートの展示なども実施した。【百武信幸】